

平成二十六年七月一日発行 第二十四巻第七号 通巻第二七七号（毎月一回一日発行）  
平成二十三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

平成26年7月号

岡井省二創刊



# マンネリ

高橋将夫

寄居虫の転居通知が来てゐたり  
燕飛ぶ自力と他力使ひ分け  
プロセスを大切にして鳥の恋  
ふらここの揺るるにまかす安定感

春愁やはずみで押した削除キー  
葉局で飴玉を買ふ春の昼  
春の風陰陽石の乾きをり  
初蝶にこの世の水は辛すぎる  
春うらら山の神へは海の幸  
人波に逆らつて行く西行忌  
マンネリの中から蠅の生まるなり

◎「槐賞」

「槐賞」は実力があると認められる作家に授与しておりますが、毎回申し上げておりますように、具体的には「槐集」雑詠欄での活躍が大きな判断要素となっております。その点で、今回推挙の前田美恵子氏につきましては、これまで槐集で安定した力を発揮されており、大方の賛同を得られるものと確信しております。

## 第二十三回 槐賞発表

前田 美 恵 子

毬栗の転がつてゆく浄土かな

前田美恵子

先づ杖が一步踏み出す日の盛り

〃

明易や湯元にもらふ人の情

〃

葉桜や昭和引き摺る駐屯地

〃

高橋将夫

# 槐安集

水野恒彦

虚子の忌の山ありて川光るなり  
雁供養沖空を統ぶ星ひとつ  
花守に花終はりたる月夜かな  
能面の朱唇つぶやく朧の夜  
春愁や鳴き砂を踏み旅終る

加藤みき

粗籠をつき出てゐたる蒲の花  
かひやぐら金比羅さんにヨットあり  
逃げ水や老将のポーカー・フェイス  
泣きごと帽も繰りごともし花吹雪  
よき人と青葉若葉に送られて

中島陽華

香棒のあきらかな揺れ雉子の声  
鯛の春あめのぬぼこ天瓊あめのぬぼこ矛ぼこの雫かな  
焼砂糖の煙のカクテル花の夜  
芸道や糞ころがしのその春に  
海老蔵の睨みきまれり春の水

竹内悦子

潮干潟 二円切手は白兔  
竹皮を脱ぐや佃煮包まるる  
一泊の旅一本の櫻かな  
いつせいに開く床屋のチューリップ  
青鰻や大島紬と腰紐と



雨村敏子

地に椿空に椿や山の道  
始まりは嗚呼てふ言葉蘂ゆる  
喜の字踊りて蛙の目借時  
逃水のあと唇の濡れてをる  
五體陽炎うて飛火野の真ん中

本多俊子

夜桜の奥に夜ざくら父の立つ  
すきとほる母の戒め山椒の芽  
オルガンは天空の音鳥帰る  
春光る人体の骨二百ほど  
子等の声春風となりかくれんぼ

近藤喜子

今だけの今いとほしむ櫻貝  
春昼や平らに時の過ぎてゆく  
ふらここを漕ぐ白日にぶつつけて  
眠くなる日差し菜の花蝶と化す  
悪霊の寄りつけぬ水芭蕉かな

瀬川公馨

春蘭をがんじがらめにして娶る  
はからずも河津桜の非業の死  
姥口を手にしてゐたり木瓜の花  
花冷にわりした切らしゐたりけり  
春の日やついついほしき市女笠

久保東海司

吟行の汗をひと薙ぎ滝の前  
妻亡くし心虚ろを花に酌む  
わが余生よしとすべきや青簾  
あめんばうおのが水輪に落着かず  
眉程の遠き白波ヨットの帆

中野京子

うらうらと心とけだす花明り  
花満つる下の彼岸にまぎれぬる  
掌に波風匂桜貝  
潮の目のかはるきつかけ桜東風  
剪定の紅き木屑のほろほろり

柳川 晋

臙なり箸にも棒にもかからざる  
落花していつもの距離に戻りける  
逃水を酌みて歌へるローレライ  
太陽をひきとめてゐる桜草  
憲法九条根分されたる顔ばかり

岩下芳子

男の子はやをとこの匂ひ初節句  
百姓と手書きの名詞麦の秋  
青空の光の中の柿若葉  
兜人形顔あるやうに飾りけり  
公園をぐるぐる廻る花の塵

近藤紀子

春水の昏き流れを出でにけり  
眼帯をとるや瞼に涅槃西風  
おとがひに桜蕊触れゆきにけり  
雀隠れの畦に軍手の置かれあり  
花びらの流れ行きたりクシナガラ

岩月優美子

今はなき比丘尼の姿亀鳴けり  
たましひの重さ残せし花吹雪  
果てしなき夢の数々梨の花  
春愁や取り戻したき日の数多  
雁風呂の煙淋しげに靡きぬ

竹中一花

法然の寺の欄間を櫻まじ  
空海の塔や春蟬低う飛ぶ  
ぽこぽこと春は土割る野に丘に  
落花さかん千一体の観世音  
狂言の鉦耳にある春の暮



# 槐市集

今井充子

売られぬし春玉葱の芳香よ  
足弱の歩調に合はせ桜狩  
下駄鳴らし初音聞きしと叫びをり  
春うらら水を抱へし墓碑の文字  
バツクする車輪免る露の臺

岡田桃子

草笛のさくらさくらや異邦人  
頸一つ抜けて俯瞰のさくら浄土  
舞い落ちる花をキャッチのお父さん  
銀瓶や筒鳥遠く湯の沸ける  
干菓子盆に落花ひとひら点晴か

庄司久美子

耕人の昔話や生駒山  
燕の子カレーのほふ幼稚園  
挨拶の野球少年蝶の空  
花冷やコントラバスは右肩に  
街角の歌声背に鳥帰る

杉原ツタ子

春暁の子守唄なる雨の音  
そよ風が消えては生れ母子草  
店先の勿忘草と目が合うて  
椿落つ瀬見の小川の水光る  
鐘の音遠くに聞こゆ土佐水木



鈴木初音

雉子歩く大地を人は耕せり  
嫌はるる亀虫の増殖膿  
安心は不安の先に花の雨  
父の忌や残花に盃を上げてゐる  
処置といふ解決の道畔塗りし

高野昌代

壺焼のぶつぶつ語り烟りけり  
老梅を整へ下肥をあがなへり  
畳屋の間口広きや新蘭草  
椀中に潮騒きこゆ若布汁  
一服のお茶の上なる花の雲

田中信行

未来都市タンポポだけが昭和なり  
背伸びして身体も春に馴染みけり  
桜散り孫子兵法読み返す  
薔薇の紋米寿迎へし女王なり  
朝風や母帰る円に薔薇の咲く

谷岡尚美

郵便局に毎年早き初櫻  
街角やあべのハルカス夏立てる  
大津絵を見て藤棚に憩ひけり  
奥山の秘仏を囲む山櫻  
草青む石舞台なり風渡る

寺田すず江

春風に誘ひ出されし山の彩  
ほろ苦き春の息吹の溢れをり  
濃密に生きたしといふ紅椿  
雲雀野や日輪斜めに過ぎてゆく  
鳥雲の赤き夕日に消えゆけり

時澤藍

田の中の主役となりし芝桜  
九頭竜や菜ノ花摘みの大曲り  
筍を掘りて父祖の顔知らず  
溜り場を一覗きする花筏  
春の山総動員の山草展

# 槐集

## 高橋将夫選

岐阜蝶に空気ほぐれてゆきにけり  
岡崎 寺田すず江

花種蒔き未来に向けて手紙書く  
はくれんの己が矜持を失はず

愛と夢はぐくんでゐるチューリップ

牡丹や歓喜の渦となりゐたる

東風吹かば邪馬台国を登記せむ  
枚方 熊川 暁子

かたまつて白魚色を生みにけり

たんぼぼやあのねあのねと自己主張

爛漫といふ重さある桜かな

口あけぬものの寂しさ浅蜷汁

春爛漫翼あるもの空に満つ  
大阪 有松 洋子

海女白き光となりて海に溶け

春深む空は膨張して軽し

亀鳴くや軽き眠気の取れずゐて

君の呼ぶわが名は詩なり風光る

花嫁は花の妖精桜色  
大阪 江島 照美

負うた子に汐干の先を尋ねらる

弱きことそれも才能啄木忌

野遊びの空にくちづけ眩しかり

夢見草現となりぬ夕桜

躍動の初蝶立てる宇治茶畑  
岡崎 鈴木 初音

春北風無量寿なれど限りあり

唐衣行きつ戻りつ春深む

春闌けて五大明王座につけり

逆立てるヒップホップの四月尽

寺田屋に竜馬の声や春の宵  
寢屋川 前田美恵子

千体の仏にまみゆ日永かな

モネに酔ひシャガールに酔ひ暮の春

庭石の蒼き深みや夏に入る

玉眼の見据ゑてをりぬ春の闇

# 銀河往来

## 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

花種蒔き未来に向けて手紙書く 寺田すず江  
「花種を蒔く」と「未来に向けて手紙を書く」がどちらも未来志向で、この気持の若さは作者ならではのもの。

〈はくれんの己が矜持を失はず〉の句からは作者の矜持が伝わってくる。

〈岐阜蝶に空気ほぐれてゆきにけり〉〈愛と夢はぐくんであるチユリリップ〉〈牡丹や歡喜の渦となりゐたる〉の句は、どれも若々しい感性が溢れている。

かたまつて白魚色を生みにけり 熊川 暁子  
一匹では半透明な白魚も集まれば色が生まれるという。白魚が集まる情景が色彩感覚で巧みに捉えられている。単に情景の描写にとどまらず、個と集団の本質にまで迫る「存在の詩」でもある。

〈東風吹かば邪馬台国を登記せむ〉の句では、「東風吹かば邪馬台国を」のいにしえから、「登記する」の現代への発想の飛躍に脱帽。もともと、邪馬台国の場所については諸説があり、確定していない状態では登記どころではないが。

〈口あけぬもの寂しさ浅蜷汁〉の句、もの言わぬは腹ふくるより寂しいという。口を開けない浅蜷もさることながら、黙って浅蜷汁をすすっているのもまた寂しい。

〈たんぼぼやあのねと自己主張〉の句の「たんぼぼの自己主張」や、〈爛漫といふ重さある桜かな〉の句の「爛漫といふ

重さ」にも作者ならではの感性がいかなく發揮されている。句の評価についてはいろんな視点があり得るが、少なくともこれだけの句をそろえる力量は誰もが素直に認めるべきと思っ

ている。

海女白き光となりて海に溶け 有松 洋子  
海女が海に潜る瞬間を「白い光となって海に溶ける」と表現したところが新鮮。

〈春爛漫翼あるもの空に満つ〉、〈春深む空は膨張して軽し〉の句は共に春の空の感じを作者らしい感性で捉えている。

負うた子に汐干の先を尋ねらる 江島 照美

さて、どう答えたのか。「その先は海」では答にならないのでアメリカとでも答えたのだろうか。人生には負うた子に教えられて浅瀬を渡るようなこともある。掲句では尋ねられたのだが、先のことは正直なんとも答えようがない。

〈夢見草現となりぬ夕桜〉の句では、夕桜にはまるで夢見草の夢が現となったかのような趣があるという。夢見草は桜の異称で、夢のメタファー。〈弱きことそれも才能啄木忌〉の「弱さも才能」、〈野遊びの空にくちつけ眩しかり〉の「空にくちつけ」はいかにも作者らしい感性。

春北風無量寿なれど限りあり 鈴木 初音

風は無尽蔵のように吹くが必ず止む。まさに「無量寿なれど限りあり」なのだ。

〈唐衣行きつ戻りつ春深む〉の句では、唐衣の往還が暖かかったり花冷えしたりして深まる春をさりげなく言いとめている。

(以下略)